

すぐそこにある改善策

ちがみ よういち
千頭 洋一

UIゼンセン同盟・労働条件局・副部長

ちょうど1年前の当欄で、UIゼンセン同盟が「30分、仕事を短くしよう！」キャンペーンに取り組むことを紹介した。これは、組合員が日々感じる仕事のムリ・ムダ・ムラの解消や仕事の仕方の改善、環境整備等を進めることで、生産性を落とさずに日々の仕事を30分短縮するためのアイデアを募集して、その周知や表彰を進める中で、時短にむけた機運を高めていこうというものである。この結果を報告したい。

昨年の年明けと年末に行ったが、あわせて1000件近い応募があった。それらの内容に投げやりなものはほとんど無く、皆まじめに考えて主張していた。「そういうやり方もあったんだ」と思わずハッとするような提案も少なくなかった。多くの労働者が、今の仕事や運営の仕方に疑問を感じ、具体的な改善策を描いているということは事実である。

集った意見をグルーピングすると、「時間・日・週毎のスケジュールリングと結果の検証を徹底する」、「応援体制を組み、個人毎の業務量を均等化する」、「資料・情報・備品等の整理整頓」、「終業予定時間を告知し、仕事の優先順位を明確にする」、「業務マニュアル等を整備し、円滑な業務遂行をめざす」、「コミュニケーションを充実させ、ムダを排除する」、「個人の意識や会社の風土改革」、「ルーチン業務、会議運営等における効率化の徹底」、「ワーク以外のライフの充実による時短の動機付け」等のテーマが多かった。

自分やメンバーの仕事の仕方や業務の運営、職場の環境に課題があることに気付き、問題意識を持ち続けること、改善していこうとすることはとても大切である。完全にムダの無い職場などあり得ないのだから。現在のように業績悪化が顕著になると、多くの企業で締め付けが厳しくなり、微細な部分まで「この通りにしろ」と押しつける経営者や管理職が増えてくる。それで業績が回復してくれれば良いのだが、往々にしてさらに悪化してしまう。すると彼らは、「対応のスピードが遅いから効果が出なかった」などと言い、非を認めないものだから、職場の空気がますます悪くなってしまう。多くの従業員は、自らの提案が一顧だにされなければ諦め、そのうち考えもしなくなってしまふ。そして、仕方なく定型的な業務に埋没していく。これは本当に恐ろしいことである。

経営者に提言したい。最近の業績悪化の原因は外部環境の急変による部分が大きく、避けがたいものだったのかもしれない。ただ、こんな時こそ、従業員の改善提案に耳を傾け、思い切って対応してみたらどうだろうか。まじめに働く人たちが、現場で起こっている課題と改善策を訴えながら、見向きもされずに効果性の感じられない業務に縛られる。そのような中で、はたして業績回復の芽は育つのだろうか。会社における主人公は、一人ひとりの従業員である。「経営者の考えと行動を変える」、そのための労働組合の戦略と活動も今、切に求められていると思う。